國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕「アート、サイエンス、テクノロジー、倫理をつなぐプラットホーム形成のための調査研究」を終えて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松谷, 容作, Matsutani, Yosaku メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000481

「アート、サイエンス、テクノロジー、倫理をつなぐプラットホーム形成のための調査研究」を終えて

松谷容作

本稿は、筆者が研究代表者をつとめ、小手川正二郎准教授を共同研究参加者にむかえた平成三〇年度学部共同研究費研究課題「アート、サイエンス、テクノロジー、倫理をつなぐプラットホーム形成のための調査研究」をまとめるものである。

同時代のサイエンスやテクノロジーの諸要素を積極的に取り込む現代のアートの実践は、人々にサイエンスやテクノロジーの「今」を感覚可能にすると同時に、それらの問題点を明らかにする。また、それらが目指す未来社会を批判的に予見もするだろう。そして、たとえば長谷川愛が《(不)可能な子供》において、同性カップルの一部の遺伝情報からできうる子供の姿や性格を予測して家族写真を提示するように、そこでの問題点や批判的な態度の多くは倫理的な側面にかかわってくる。このように今日のアートの営みはサイエンスとテクノロジー、倫理を横断的に結びつけている。だがこうした野心的でスペキュラティブな実践が、サイエンスとテクノロジーそれぞれの領域のなかで真に受けとめられることはない。分野間での相互理解が乏しく、没交渉の状況が生じているからだ。しかしながら、アートとサイエンス、テクノロジー、さらには倫理の間で交通整備をし、かつアートの反省的な視座を検証することが可能であれば、現在や未来の社会を私たちはもっと積極的に設計できるのではなかろうか。

以上の問題意識のもと本研究課題は、上述の交通整備と検証を可能にする場をプラットホームととらえ、それを形成するための基盤的な取り組みを試みた。具体的には、アーティストやデザイナーの作品や実践を起点として、彼／彼女らと科学者、技術者、倫理学者など、様々な領域の専門家たちによるレクチャーおよび実演と、レクチャー参加者たちとの対話を実現する連続フォーラムの開催、またプラットホーム形成にかかわる資料調査や視察調査となる。

ただしここでは、紙幅にかぎりがあるため、課題の中心となる計五回のフォーラム（本学で開催）の概要を記すこと

にする。開催した五回のうち二回目以降は、国際交流基金アジアセンターとの共催で開催した。国際文化交流事業を実施するこの専門機関は、様々な領域を交差させる試みを何度も実現しており、そのなかで培った知見とマネジメントの方法論は本課題にとって深く参照すべきものであるからだ。本課題はこの機関との共催でプラットホーム形成のための重要な知見と方法論を獲得したと言える。[1] 実際には以下のようにフォーラムは開催した。

第一回「小野さやか『恋とボルバキア』上映会とディスカッション」（平成三〇年一〇月九日於常盤松ホール、登壇者：小野さやか（映画監督）、いりや／古怒田望人（哲学者））

第二回「音の芸術を構成するもの—聴く・再生・演奏の関係性から」（平成三〇年一〇月二五日於一三〇周年記念五号館五三〇二教室、登壇者：dj sniff（ターンテーブル奏者、DJ、キュレーター）、金子智太郎（美学、聴覚文化論研究者））

第三回「いまネットレーベルから生まれる音楽—流通・都市・経験—」（平成三〇年一一月一五日於一二〇周年記念一号館一三〇五教室、登壇者：tomad（オーガナイザー、DJ、Maltine Records主宰）、日高良祐（メディア研究、ポピュラー音楽研究者））

第四回「明るい？？家族計画：科学技術と倫理、スペキュラティブ・デザインによるアプローチ」（平成三一年一月一七日於一三〇周年記念五号館五三〇二教室、登壇者：長谷川愛（アーティスト、デザイナー）、小手川正二郎（哲学者））

第五回「ミクロな世界を感知すること—放射線・人間・環境」（平成三一年二月二七日於三号館三三〇七教室、登壇者：三原聡一郎（アーティスト）、眞田幸尚（放射線モニタリング研究・技術開発者）、木元崇宏（東京電力ホールディングス(株)福島第一廃炉推進カンパニーリスクコミュニケーター））

以上のフォーラムを通じて、のべ二〇〇名弱の参加者があった。たしかに参加者の数は配慮すべき事項のひとつである。だがもっと重要なことは、フォーラムを通じて登壇者と参加者すべてが、そこで提起された問題について深く思考する（あるいはそのきっかけとなる）ことである。この数と質の両面をさらに発展させるプラットホームの形成を今後も探求することが筆者の今後の課題となる。

（美学・視覚文化論）

（1）とくに国際交流基金アジアセンターの武田康孝氏、廣田ふみ氏、鹿島萌子氏には深く感謝を申し上げたい。また、この連続フォーラム開催にあたって、本学の研究開発推進機構事務課のスタッフの皆様にも多大なサポートをいただいた。合わせてお礼を申し上げたい。